

句集

貝風鈴

谷崎
はく子

序

大阪府寝屋川市の谷崎はく子さんも又初句集を纏められることになった。

彼女とはインターネット句会のメンバーとしてご縁が生まれ、その後、親友の満天さんとともに現在に至るまでずっと句会の世話人として労して下さっているのである。

貝風鈴渚恋ひしと鳴くならん

露天湯にわれ一人なる朧かな

愉快的満天さんに対して、はく子さんは冷静沈着、実に対照的な二人なのであるが、この個性の違いが相乗して素敵なコンビネーションを醸し出し、句会でお世話になる私達にもなるとなく安心感を与えるのである。

赤銅の岩をさ走る滝白し

通し土間涼しつつかけ下駄並ぶ

はく子さんたちは、吟行で詠むことを自らに課し徹底してそれを励行された。その結果、頭で考えても句は浮かばないが吟行にさえ行けば何とかなる…というのが口癖になるまでに染みついた。他人の受けを狙って虚構の句をいくら詠みためても何の意味もないのである。

病む夫と頰けあひて食ぶ聖菓かな

夫の分まで生きなんと去年今年

ご主人が倒れられてからは介護の日々を余儀なくされたが、俳句が彼女を支えたと私は思いたい。句仲間たちの励ましや背後の祈りは何にも変えられない勇気なのである。

一人居のきまま春眠はばかり

ご主人亡きあとのはく子さんは寂しさを句に吐き出すことも多かつたが、昨今はようやく
平安な日々をとり戻されつつある。

これからも折に触れて寂しさが募ることは何度もあると思うが、聖書は先に召された家族
と天国で必ず再開できることを約束している。与えられた余生の命を感謝し、愛おしみつつ
天国のご主人へ届く詩を詠いつづけましょう。

平成三〇年七月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

旅涼し津軽なまりのバスガイド

高梯子まだその上の松手入

鹿の子に生え初む小指ほどの角

つぶらなる鹿の瞳に癒やさるる

そら豆を剥きたる後の莢の嵩

純白の天使の像に囀れる

落花舞ふホーム特急通過中

舟波に片寄せらるる花筏

渦潮に育ちし若布届きけり

ベランダを埋め尽くして桜草

一人居の気まま春眠はばかり

助手席はゆりかご春眠避け難し

盆梅展琴のしらべに巡りけり

ほっほつと漁火点る春の宵

まなかひに火の山見つつ踏青す

菜の花や開聞岳は模糊として

春光の川面は切子揉むごとし

ヨガ修行百畳敷の堂寒し

墓碑の靈寧かれと降る春の雪

高欄に風花の古都一望す

振舞の甘酒もろて包みかな

連風の駈け上りゆく虚空かな

天国の夫へ届けと除夜の鐘

夫の分まで生きなんと去年今年

背高の孫頼みとす年用意

シヨールーム赤きベンツと聖樹かな

凍て空に研ぎ澄まされしヒ首の月

べつ甲に透きて美味さう煮大根

濯ぎもの干してしばらく日向ぼこ

黄を極め寺領を統ぶる大公孫樹

冬帽子脱いで存問恩師の碑

千手もて秋天支ふ楠大樹

根が岩を嚙む老松に天高し

露けしや堆く積む無縁墓

夫の忌を修して安堵鉦叩

凶鑑手に巡る麓の大花野

墨をすする音のかそけき白露かな

大淀の水の豊かに秋立ちぬ

ファッションにあらざ術後のサングラス

子に返る老いの笑顔や西瓜食ぶ

奈落の瀬見えざるも音涼しかり

あめんぼう雲居を駈くるごときなり

足裏にフローリングの梅雨じめり

草庵を覆ふもみぢに遅速あり

はかどらぬ遺品の整理秋灯

秋晴れに扉を全開す大法堂

秋深し遺影に話かけもして

吟行に行ける幸せ秋天下

はたた神かとふり向けば遠花火

白無垢の蓮の宝珠や神の池

産土へ詣でがてらの探梅行

煤逃げはもつてのほかや介護妻

病む夫と頒けあひて食ぶ聖菓かな

高鳴れる婚儀の雅楽宮小春

黄落のまつ只中に車椅子

露天湯へしぐるる径を下りけり

神苑の力石より秋の声

山頂はとんぼ楽園肩に手に

古都暑し大路小路に人あふれ

秋嶺の仏舎利塔のいや白し

ひしやく星垂れて海上花火果つ

真つ白になりたる夫の髪洗ふ

老二人に見舞ひのメロン多すぎて

玉砂利のささやく青葉時雨かな

メロン付く明日退院のデザートに

大噴水メタセコイアと秀を競ふ

梅雨の冷看取りの部屋の足下より

万緑裡古刹の鐘に身を濯ぐ

濃く淡く交差す森の新樹光

老二人氷菓一つを頒けあひて

通院す蓮華浄土の道選び

跡継ぎの生れし寺に鯉のぼり

うららかや春日野に鹿療養所

通院の帰りは花の道選ぶ

車椅子降りて十歩の青き踏む

手作りの雛は母の着物着て

病状の行きつ戻りつ春を待つ

退院の夫を聖菓でお祝す

五山みな火床抱へて眠りけり

温めて看取り戻りの一人鍋

散紅葉池に友禅模様描く

黄落の散敷く道の夕明かり

ゆりかもめ大棧橋に一並び

秋しぐれ祇園の路地の灯点りて

月はいま赤銅と化し蝕極む

夕映えて真珠びかりすうろこ雲

爽やかやポンポン船の音もまた

秋うらら末の孫にも背を越され

夏野菜たつぷりと入れカレー食ぶ

和太鼓が活気づけをる揚花火

砂浜にごろ寝して見る揚花火

国生みの島へ散華す大花火

貝風鈴渚恋しと鳴るならん

異空間なせる玄室いと涼し

駅長の趣味といふ鯉池涼し

薫風裡大縄跳びの息そろふ

老鶯や嶮磴に息整へむ

雑魚寝なる船室の窓明易し

疾駆する馬の鬣若葉風

流鏑馬の駈け抜けてゆく若葉道

春日傘翳すは合図待ち合わせ

訪ねたる恩師の句碑に梅匂ふ

ピカピカに広縁磨き春を待つ

百寿なる師を寿ぎて初句会

省くこと多し余生の年用意

露天風呂冠雪の富士まなかひに

雲一つなき中天に月冴ゆる

露天湯にわたし独りの秋惜しむ

鐘一打して無住寺の秋惜しむ

虚子塚に佇みをれば秋の声

天高し杉の美林の直線美

夕づつを魁として今日の月

色変えぬ松天に伸ぶ冠木門

名水に喉をうるほす残暑かな

身に入むや少年兵の遺言書

古民家の涼し一步に通し土間

山襖現る遠花火揚がるたび

干し梅のあけぼの色となりけり

大雨のやみて涼しき夜景かな

木道の行く手に立ちし雲の峰

噴水のラインダンスや楽愉し

臍取りは孫の役目よ梅漬くる

宮涼し湧きて絶えざる御神水

万緑やエレベーターはシースル

風薫る大縄跳びの子供らに

トンネルを出て目つぶしの新樹光

野遊びやボールを子らに蹴り返す

瓔珞のころもとなき古雛

ようやくに鳴りて喝采瓢の笛

露天湯にわれ一人なる臃かな

冠雪の富士象嵌す館の窓

豪快に豆まく郷土力士かな

降る雪に繭ごもりめく月円か

上げ潮にふくるる川面ゆりかもめ

寒夕日櫛比のビルの影法師

しばらくを柚子と遊びて冬至風呂

寒オリオンよぎるは飛機の瞬く灯

高階の茶房に街の秋惜しむ

木の實独樂大尻振つて止まりけり

藍の空残して釣瓶落としの日

人生はこれより佳境天高し

萩がくれなるこの寺の句碑数多

焼岳の噴煙かはた秋雲か

秋麗の穂高一朶の雲もなし

天 空 へ 続 く 木 道 大 花 野

穂 高 嶺 の 主 峰 映 し て 池 澄 め る

う ち 仰 ぐ 一 万 尺 の 花 畑

東雲の雲脱ぐ穂高秋澄める

暗闇の雲を切り裂く稲光

小夜更けて繭ごもりなる月涼し

無事に立つ鉾に喝采京大路

風鈴の奏ぶここらは呉服町

鏡なす水面御田植まつばかり

山椒魚岩を盾とし身じろがず

和太鼓を打つ万緑のふるへとぞ

大寺の蘘を泳ぐ鯉のぼり

春憂ふ母ゆずりなる一病に

夕日いま花の大川染めにけり

巫女に享く点茶サービス梅の宮

行厨は梅の丘なる四阿に

地団駄を踏みてバス待つ息白し

初旅のバッグに真白なる句帳

池の蓮枯れをつくして立ち尽くす

電飾に並木の枯れ木目覚めけり

主婦業の我もボーナス頂きぬ

夕日いま終のほむらを枯山に

古本屋おでん屋隣る大学祭

いてふ散る都大路を黄に染めて

ガラシヤの辞世の歌碑にもみぢ散る

水琴窟われもわれもと苑小春

城址とて石垣ばかり草もみぢ

深吉野の山紫水明秋澄める

野菊濃し天誅組の墓所

秋惜しむ女人高野の丹の欄に

川澄みて磨崖弥勒の裾洗ふ

峡の宿更けて漆黒星月夜

銃眼の四角三角秋日影

連山の屏風立ちして月揚ぐる

バイク族夜毎徘徊秋暑し

秋天を切り裂くさまに飛行雲

玉ねぎを簾と吊す軒深し

復興を誓ふ短冊星祭

ナイターのさよなら負けに帰路無口

熱帯夜また救急車馳せる音

庭に得しくさぐさをもて夏花とす

定例句会入選句

グランドゴルフ薔薇満開の苑の中

行厨はバラに咫尺の苑ベンチ

振れば鳴りさう鈴なりの花あせび

石柱にしるき弾痕身にぞ入む

冬ぬくし祈りの小径もとほれば

瞑想の森のベンチに日向ぼこ

萩雨に伏して山路を塞ぎけり

松籟の涼しといゆく川堤

羊齒涼し森の洩れ日をうち煽ぎ

せせらぎに沿ひてカラフル七変化

蝶纏れつつ木洩れ日に紛れけり

野に遊ぶ名草醜草隔てなく

紅白の梅綾なして丘埋む

ピエタ像籠に野の花溢れしめ

堂に満つオルガンの音の温かし

彩窓を貫く春日木椅子へと

絵灯籠みな手作りや阪神忌

遍路寺子規直筆の書を宝

弔ひの礼をしたたむ秋灯下

山上の碑に立ちて聞く秋の声

池の波蒲の穂波と交錯す

赤銅の岩をさ走る滝白し

奥池へ鹿垣の扉の押せばあく

ひるがへる五彩のテープ豊の秋

風あふちやまらずよ谿の葛畳

隠沼に響くバリトン牛蛙

豊頬の観音像や樹下涼し

奈落から仰ぐ絶景梅の丘

喬木の葛をまとひて直立す

内海の風に傾くヨットかな

根上がりをベンチとしたる樹下涼し

道祖神へくそかづらをまとひけり

と見る間に雪と変はりし車窓かな

六甲の天辺
灰と雪被く

松手入眺めが
うれしカフエテラス

遅々として
進捗見えぬ松手入

遠山を透かせて光る薄かな

かく長きまつげの欲しや曼珠沙華

草じらみ幾何学模様描きけり

何故に後じさりせる道をしへ

おにぎりを分け合ひてみな花下微笑

露天湯に灘一望す避寒かな

鴨浮寝雨の水輪の間間に

なかなかはその気にならぬ年用意

滝の道立ち止まる度風涼し

滝ひとつつ木の間がくれにもうひとつ

この郷を出でず古希なり木の葉髪

吟行句会入選句

浜日永漁網修理に余念なし

国生みの島泰然と青葉潮

新藁となりし知恵の輪くぐりけり

粧へる山裾縫ひてバス楽し

侘助の一穢なき白咲きつらね

琴坂に高鳴る水音冬もみぢ

宇治川の丹の欄干に片しぐれ

高揚がる噴水雲に触れむとす

通し土間涼しっつけ下駄並ぶ

蔦紅葉覆ふ老舗の珈琲館

秋うらら焼き立てパンの匂ふ路地

秋霖に楽士の像の濡れそぼつ

秋天下若草山のまろしかな

つと吾に寄り来るはぐれ螢かな

尺取り虫地に着くまでの宙測る

強東風の恋人岬人を見ず

口開けて並ぶ蛸壺浜日永

御座船を浮かべて装ふ小倉山

妃陵真紅のもみぢ手向けられ

爽やかや咫尺に拝す微笑仏

磴のぼるほどに展けし豊の秋

夢殿へ道はまつすぐ初もみじ

金魚田の間に青田の郡山

古町を貫く紺屋川涼し

急礮に展けし里の豊の秋

金魚柄染めて紺屋の麻のれん

岩の先真珠つなぎに滴れる

大川の水満満と花日和

行厨の吾らにいまし花吹雪

花見船行く手に現れし天守閣

杓置きは瑞の太竹梅の宮

抹茶飲み干せば雛の絵の現るる

蝶のごと木の葉高舞ふ金風裡

山笑ふ坑道あまた懐に

温かや震災復興祈る絵馬

石庭の砂紋のままに雪残る

風吹けばかそけき音や枯蓮

堂に満つ信徒千人報恩講

畦道の案山子百態虫はやす

秋天へ棚田幾枚数へけり

鹿の耳びくびく動く新樹風

行厨にぬつと顔出す孕み鹿

山上駅夏うぐるすに迎えられ

吉野窓開けて誘ふ若葉風

翡翠の一閃水のきらめきぬ

鴨をかし尻おつ立てて潜りけり

湯の町を走り高鳴る雪解川

色変へぬ松を守りて一末社

あとがき

思ってもみなかった自分の句集を目の前にして戸惑いと喜びにどきどきしています。

早いもので俳句にかかわってから四十年近くが経ちました。初めは地元の俳句会に月一回参加するのみで、吟行もなくのんびりと俳句を楽しんでいました。

十数年経ったあるとき不思議なご縁で『ゴスベル俳句』と出会い、菜々さん、満天さんらとご一緒に毎月の吟行句会に集うようになったのです。それ以来十年近く、句仲間のみなさんとともに充実した俳句ライフを楽しませて頂いております。

八十路近くになって頭も体もますますゆっくりのんびりになって来ておりますが、皆様のお力をお借りして出来るだけ長くつづけられますように頑張ります。

最後になりましたが、句集作成にあたり身に余る序文を賜り何かとお骨折りを頂きましたやまだみのるさんと、印刷製本の労を引き受けて頂きました有松せいじさんに心から感謝しお礼を申し上げます。

平成三〇年七月吉日

谷崎 はく子

『貝風鈴』 谷崎はく子句集

平成三〇年七月三〇日 印刷

平成三〇年七月三〇日 発行